

人がインスクリプションを用いて可視化する「人・もの・世界の関係」の多義性：川床論文に対するコメント

當眞，千賀子
国立国語研究所

<https://hdl.handle.net/2324/7403594>

出版情報：JAPANESE PSYCHOLOGICAL REVIEW. 43 (1), pp.24-26, 2000. 心理学評論刊行会
バージョン：
権利関係：© 2000 心理学評論刊行会



人がインスクリプションを用いて可視化する 「人・もの・世界の関係」の多様性

——川床論文に対するコメント——

當 眞 千賀子

国立国語研究所

川床論文(2000)は、テクノサイエンス(Latour, 1987, 1988)や科学のエスノメソドロジー(Lynch, 1985, 1990, 1991)の研究において、インスクリプションが単なる記録ではなく、人、もの、世界を結ぶネットワークの構成要素のひとつであると同時にその関係を可視化する道具として位置づけられていることに注目し、そのような観点から、倉庫や工場などの現場における実践の組織化過程で様々なインスクリプションがどのように機能しているかについてフィールドワークに基づく考察をしている。論文中では特に言及されていないが、このような川床の分析は、H. Garfinkelを祖とするエスノメソドロジーをベースとしたSuchman(1987, 1996)やGoodwin(1981)らによる状況的行為論の枠組みに大きく依拠したものであると考えられる。現在、この状況論的アプローチは、テクノサイエンスや科学のエスノメソドロジーといった研究の流れと接点を持つ視点から様々な仕事場での実践における行為・認知・道具の組織化を分析する一連の論文を発表しており(例: Goodwin & Goodwin, 1996; Suchman, 1996; 上野, 1999 他)、この論文もそのような流れの中に位置づけることができるだろう。

さて、この論文において強調されているようにあらゆるインスクリプションが「人、もの、世界の関係」を可視化する道具として機能するとなると、インスクリプションとしてのこの論文はどのような関係を可視化し、なにを見えなくしているのだろうか。以下ではこの点について考えてみたい。論文中で紹介されているように、様々なインスクリプションはどれもそれ自体で関係の全体を可視化するわけではなく、現場でのローカルな状況に応じていくつものインスクリプションを多層

的に重ね合わせる行為が必要となる。また、全体を一挙に可視化することは「神」のような絶対的視点を想定しない限り不可能であり、それはエスノメソドロジーの発想に反するものである。したがって、この論文で不可視になっていることを取り上げる目的は、それらが論文中で可視化されていないこと自体を批判することではなく、「見えてこないこと」によってこの論文が可視化していることの特徴を浮き立たせると同時に、新たな研究(可視化)の方向の可能性を探ることにある。

可視化していること

川床論文では、刻々と状況が変化する現場において、どの瞬間にもすべての物の流れや生産の工程、作業者の動きを「完全」に把握し制御する特権的な視点や指令系というのは存在しないにも関わらず、物が流れるべき方向に流れ、作られるべき製品が作られていくということが可能になるように人と物の動きが組織化される過程で、様々なインスクリプションが、物の流れを可視化し作業を組織化するためのリソースのひとつとして用いられている様子が興味深く描き出されている。また、そのような記述により、インスクリプションが「人、もの、世界」を結ぶネットワークの構成要素のひとつであると同時にその関係を可視化する道具であるというLatourらの主張を支持していると言えよう。

見えてこないこと、そして、 見えないことから見えてくること

I この論文からはよく見えてこないことの1

点目は、各現場で働く人々が、論文中に記述されているようなインスクリプションを用いた「見え」を成立させるようになる過程である。

この論文では、現場での活動を円滑に組織化するためのインスクリプションを用いた特定の「見え方」は、すでにある程度安定したものとして扱われている。もちろん状況的行為論的立場から、具体的でローカルな状況に応じたヴァリエーションを前提としているが、それでも観察者（川床）が作業者の特定の「可視化」のあり方を記述できる程度には安定しているものである。

しかし、初めて職場に足を踏み入れた職員の初日の「見え」はどうであろうか。察するにパッケージに記された「冷紅サケ S 寿し XX 産」というインスクリプションを見ても「箱の中身は XX 産の冷凍紅サケで、S 寿しの材料になるのかな」ということが「見える」のが精一杯で、とてもここで記述されている作業者のように「このブランドは大手加工食品会社のものだ。サケの産地から見て箱の中身は寿司の具だろう。寿司のチェーン店に卸す商品だとすると、毎日、一定量出ていくに違いない。取り出しやすいように、奥の通路に仮置きしておこう」というような物流の可視化は無理であろう。このような点に注目すると、川床論文で採用されている「グリッド」が比較的安定した活動の組織化の過程を可視化するものであることが見えてくる。

作業員のこのような可視化が成立するに到るプロセスを追うには、この論文の視点とは異なる「グリッド」が必要となる。そのような「グリッド」を考える上で、L.S.Vygotsky の「二重刺激課題による方法」に関する議論が有効な手がかりのひとつとなり得るのではないだろうか。Vygotsky は、人が特定の課題状況下で行為を生み出す際に、色カードのような物やある種のインスクリプション（無意味つづり）などを、注意を随意的・自覚的にコントロールしたり意味を形成したりするための記号として機能させるようになる過程を発生的に分析している。このような観点は、状況的認知論の枠組みではあまり取り上げられてこなかったものであるが、特定の実践の場で、人があるインスクリプションを用いて特定の「見え」を成立させるようになる過程を理解するには、探索されるべき方向のひとつではないだろうか。

Ⅱ 見えてこないことの 2 点目として、様々な非一業務的インスクリプションを取り巻く「人、もの、世界の関係」がある。この論文で取り上げられている仕事場でのインスクリプションを追ってみると、積荷に記されたマークや文字、荷札の記号や色、入庫案内、入庫依頼書、作業標準書、帳簿など、すべて仕事場でのオフィシャルな業務に関わるものであることがわかる。この他に、人びとが生きる場としての仕事場には、これらのインスクリプションとは異質な様々なインスクリプションがあるのではないだろうか。例えば、様々な場所の落書き、メモ、作業着の下に着ている T シャツの文字や記号、マンガや雑誌、その他諸々の「業務」の表側には顔を見せないインスクリプションたちである。

このように考えると、川床論文で用いられている「グリッド」は、仕事場における活動の組織化をオフィシャルな「業務」の視点から可視化し、相即的に「業務」的な「人、もの、世界の関係」を立ち上げるものであることがわかる。このグリッドを用いると、人間はオフィシャルな「業務」を遂行すべく組織化されるネットワークの「アクター」の一員として可視化されることになる。そこには、このような役割に吸収し尽くされない人びとの姿は見えてこない。業務的な「人、もの、世界の関係」には還元され得ないような「人、もの、世界の関係」を組織化するのに用いられるインスクリプションの機能を可視化するには別のタイプの「グリッド」が必要となるだろう。

観察者自身が用いる「グリッド」をいくつか多層的に重ね合わせることによって、活動の組織化過程にこれまで見えていなかった奥行きが見えてくる可能性があるのではないだろうか。このような可能性を探ってみることも今後の展開の興味深い方向のひとつではないだろうか。

文 献

- Goodwin, C. (1981). *Conversational organization: Interaction between speaker and hearer*. New York: Academic Press.
- Goodwin, C., & Goodwin, M. H. (1996). Seeing as a situated activity: Formulating planes. In Y. Engeström & D. Middleton (Eds.), *Cognition and communication at work* (pp. 61–95). New York: Cambridge University Press.

- 川床靖子 (2000) 人, もの, 世界の関係を可視化するインスクリプション 心理学評論, 43, 8-23.
- Latour, B. (1987). *Science in action*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Latour, B. (1988). *The pasteurization of France*. Cambridge, MA: Harvard University Press
- Lynch, M. (1985). *Art and artifact in laboratory science*. London: Routledge & Kegan Paul
- Lynch, M. (1990). The externalized retina: Selection and mathematization in the visual documentation of objects in the life science. In M. Lynch & S. Woolgar (Eds.), *Representation in scientific practice* (pp. 153-186). Cambridge, MA: MIT Press.
- Lynch, M. (1991). Laboratory space and the technological complex: An investigation of topical contextures. *Science in Context*, 4, 51-78.
- Suchman, L. (1987). *Plans and situated actions: The problems of human machine communication*. New York: Cambridge University Press.
- Suchman, L. (1996). Constituting shared workplaces. In Y. Engeström & D. Middleton (Eds.), *Cognition and communication at work* (pp. 35-60). New York: Cambridge University Press.
- 上野直樹 (1999) 仕事の中での学習: 状況論的アプローチ 東京大学出版会.

— 2000. 4. 16 受理 —